

国指定史跡 フルスト原遺跡

国指定史跡 フルスト原遺跡の概要

フルスト原遺跡は、1978（昭和53）年3月3日に国指定の史跡となりました。約12.3haの大きな指定面積に広がる高い石積み遺構は、一見、沖縄本島を中心にみられる「グスク」と類似します。しかし、現在の研究では、いわゆる城郭としての機能よりも屋敷囲いの石垣としての要素が強いと言われます。その理由のひとつとして、海岸付近の低地にある集落遺跡と同じような生活用品（土器や中国産陶磁器など）が数多く出土し、武器にあたるものが見られないことなどが挙げられます。遺跡が存続した年代は、おおよそ14世紀後半～16世紀初頭で、15世紀に最盛期を迎えています。



フルスト原遺跡とオヤケアカハチ

フルスト原遺跡には、15基の石塁（せきるい）遺構（石積み）が確認されています。現在、遺構確認のための発掘調査および復元作業、進入路の整備などが年次的に実施されています。遺跡は、標高25メートル前後の石灰岩丘陵上に位置し、眼下には宮良湾を臨みます。このような立地条件から、以前は沖縄諸島のグスクと同じ、城郭としての機能が考えられてきました。また、石垣島大浜の英雄であるオヤケアカハチの居城と考える人もいます。しかし、発掘調査により、オヤケアカハチが活躍した15世紀後半ではなく、それよりも100年ほど前から遺跡が存在していたことがわかっています。いずれにしても、この土地は石垣島大浜の人々にとって、重要な意味を持つ場所と言えるでしょう。

フルスト原遺跡の石塁遺構

石塁遺構は、15基確認されています。遺跡に近接する旧石垣空港は、もともと昭和18（1943）年に海軍飛行場として建設されました。そのため、戦時中には滑走路などが攻撃を受け、そのたびに爆撃痕を埋めるため、フルスト原遺跡から石灰岩塊を運んで施設を補修したそうです。そのほかにも、畑に利用されたりする中で、石積みはかなり形を変えてしまいましたが、発掘調査によって、石積みの基礎の部分（根石）が確認されています。現在は、古老の記憶にある6尺～7尺という高さで石積みの復元作業が進められています。



フルスト原遺跡を見学なさる皆さまへ

フルスト原遺跡は整備中のため、レンタカーで遺跡内に入ることはできませんが、進入路などが舗装されていません。また、定期的な伐採作業を実施していますが、復元された石塁遺構の周辺まで草木が繁茂しており、足場が悪くなっております。

お子様連れの方は、特にその点をご注意の上、見学くださいますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

なお、進入路は、遺跡北側の市道タナドー線側をご利用ください。

※南側の道は、畑の間を抜けるため、車高の低いレンタカーには不向きです。遺跡内にも、簡易な解説表示が設置されています。